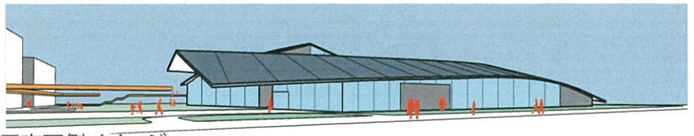
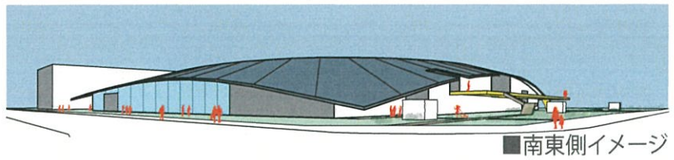
※印の欄は、記入しないでください

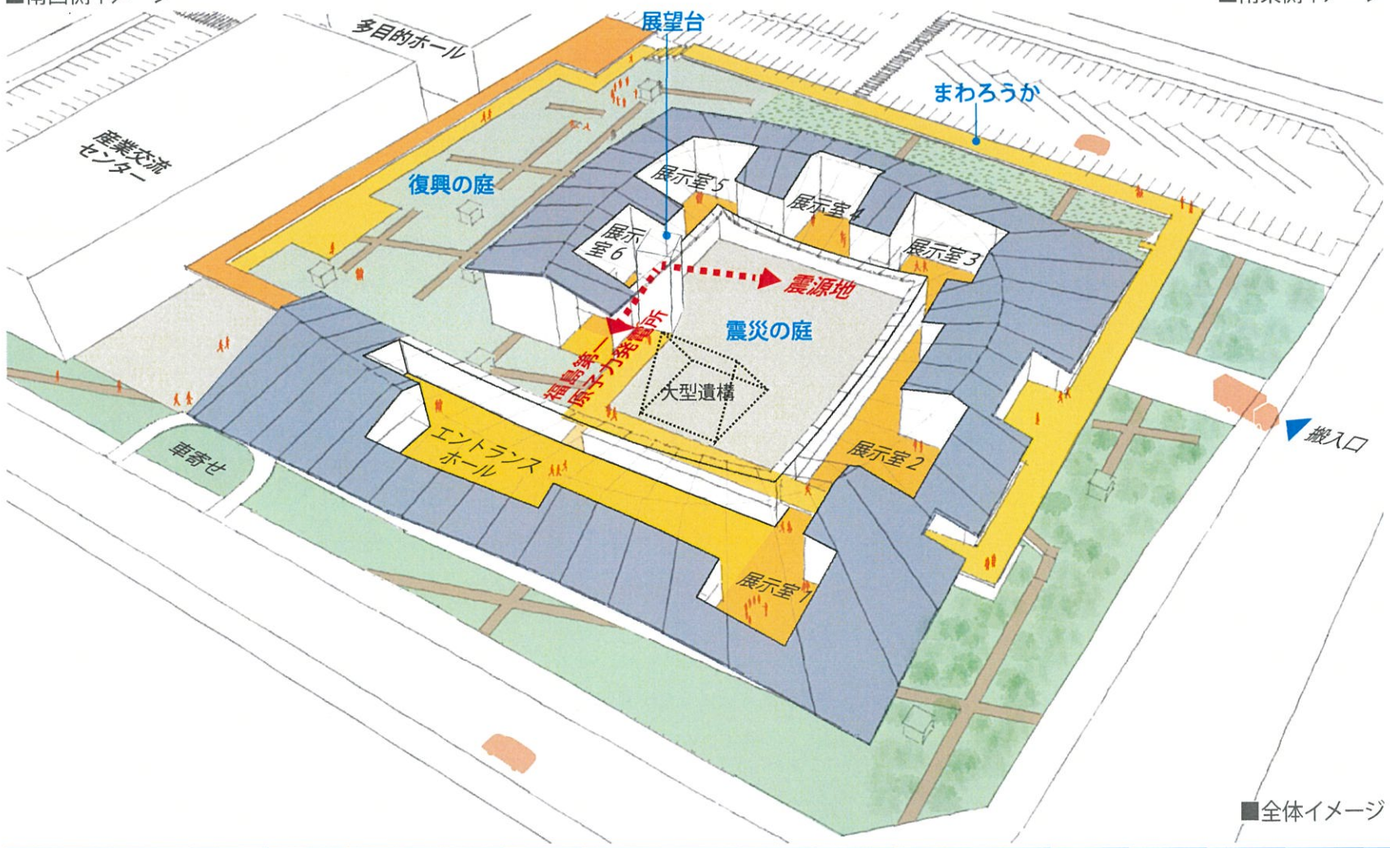
受付番号 ※ 3



■南西側イメージ



■南東側イメージ



■全体イメージ

2. 複合災害の記憶を未来へ継承するための建築物としてのあるべき姿について

■複合災害の２つの軸線

敷地から東日本大震災の震源地と福島第一原発を結ぶ**二つの軸**を、建物やランドスケープデザインのベースとします。来訪者の意識を敷地近傍にとどめず、二つの大きな災害と被害がもたらされた広範なエリアへ思いをはせるきっかけとします。

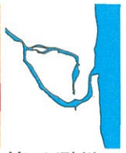
■今までとこれから

双葉町の「今まで」と「これから」をイメージさせる二つのらせん状の空間が絡み合った構成とします。災害のアーカイブとなる建築空間は「今まで」をあらわすように中央へ向かいながら徐々に意識が高まっていく**求心的な空間**とします。復興の庭と名付けた屋外空間は「これから」を指し示すように外へ向かいながら**拡張していく空間**とします。「今まで」と「これから」が組み合わさり、未来への希望を表現する建築となります。

■双葉町のこれまでを取り込む建築形状

らせん状の構成は、双葉町の史跡である清戸迫横穴の壁画の渦巻き文様や双葉町の中心部を流れる前田川河口の砂州をイメージさせるものとなります。災害を伝えると同時に、**双葉町のこれまでの歴史や自然の地形に思いをはせる**ことのできる建築とします。

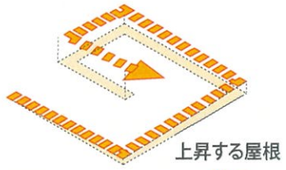
清戸迫横穴壁画



前田川砂州

■未来へ向かって上昇する屋根

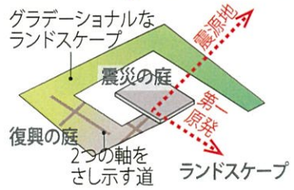
外から内に向かうにつれて徐々に上昇していく屋根形状とします。中央部を最も高くして、展示のシークエンスの演出をサポートします。さらに、中央部の震災の庭には周囲を見渡すことができる展望施設を設け、周囲の公園や海、二つの災害の源を眺めることができるようにします。復興エリアの中で、シンボリックな役割を果たす建築となります。



上昇する屋根

■復興祈念公園と続くランドスケープ

草原と二つの軸、展示物からなるランドスケープデザインとします。あらかじめ全体を整備するのではなく、徐々に緑化されていく考え方をとります。荒れ地から草原・林へとグラデーショナルな構成として、復興祈念公園へとつなぎ、「これから」を体感させるランドスケープデザインとします。



1. 復興の拠点としてのアーカイブ拠点施設等の配置のあり方について

■全体配置

施設群は東南の角に配置し、南側の復興**シンボル軸**に対する顔を形作り、東側の復興祈念公園との連携を図ります。駐車場は、復興シンボル軸側・公園側の双方からアクセスできるようにＬ型の形状とします。

■復興の庭

シンボル軸と公園をつなぐＬ型のオープンスペース「復興の庭」を設け、そのオープンスペースに面して、アーカイブ拠点、多目的ホール、産業交流センターのエントランスを設けます。駐車場は外周を取り囲むように配置し、駐車場からのアクセスを考慮します。

■配置の相乗効果

それぞれの施設と屋外空間を相互に関連づけ、相乗効果を生み出していきます。産業交流センターの飲食・店舗とアーカイブ拠点のエントランスホールが通りに賑わいを創出し、復興の庭はコンベンションの屋外イベントやアーカイブ拠点の屋外展示に用いることが可能です。

■らせん状の配置

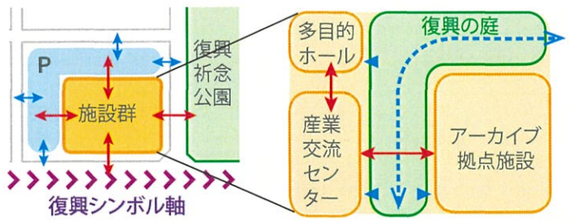
オープンスペースと建築ヴォリュームをらせん状に組み合わせた配置とします。外部を巻き込み、中心性を感じさせる空間図式です。復興の拠点施設として、周囲を巻き込みながら発展をしていく配置計画です。

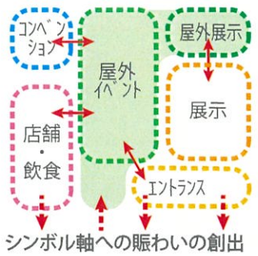
■拡張可能な施設配置

アーカイブ拠点が先行して、順次産業交流センターや多目的ホールが整備されます。さらなる復興、展開を想定し、北側駐車場を建築の拡張用地と位置づけ、西側に予備の駐車場を確保します。将来のコンベンション機能の拡充などに対応可能です。

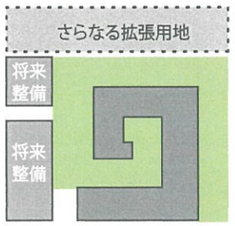
■まわろうか

敷地を回遊しながら施設をつないでいく屋外の通路「まわろうか」を設けます。復興の庭を上から眺める階上の道から、３つの施設をつなぐ地上レベルの道へと接続します。利用者の利便性を高めると同時に、敷地全体の一体感を生み出します。津波など浸水の際の避難場所としても機能します。

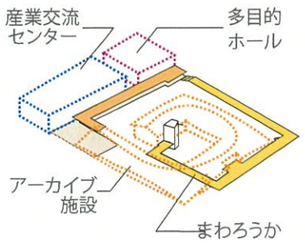


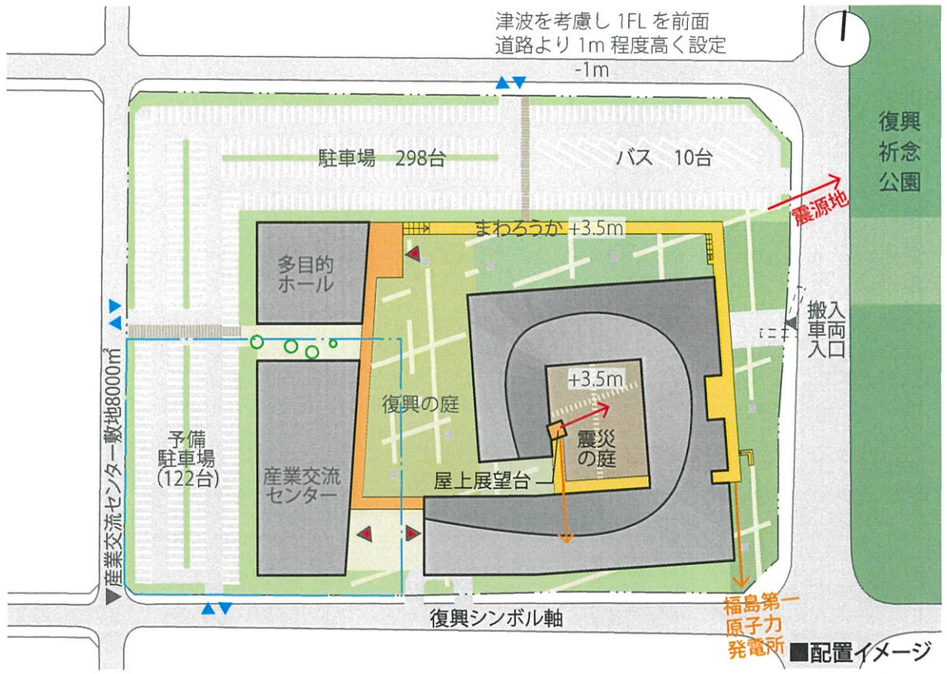


シンボル軸への賑わいの創出



らせん状の構成



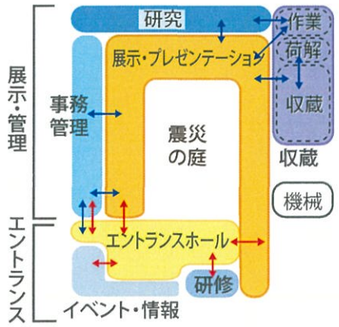


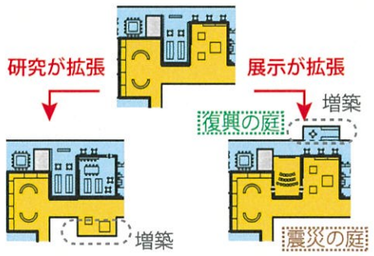
■配置イメージ

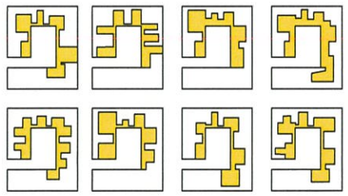
※印の欄は、記入しないでください

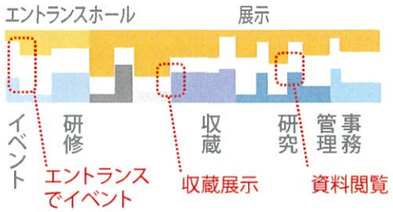
受付番号
※ 3

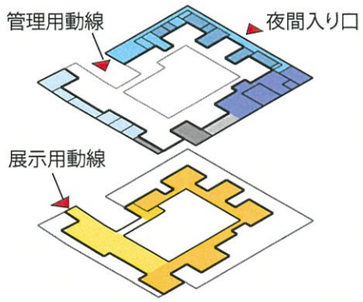
3. 施設利用形態の変化に対応した施設整備と各エリアの連携及びセキュリティを考慮した利用動線のあり方について











レベル0：誰でも利用可	
レベル1：来訪者が利用可	
レベル2：関係者のみ利用可	
レベル3：〃　（資料を扱う室）	
レベル4：利用に制限(収蔵庫)	

■機能ゾーニング

シンボル軸沿いにエントランスホールを設け、その裏側に展示・管理部門を配します。展示室は、「震災の庭」を囲む口の字型の構成として、さらにその外側を事務所や研究部門、収蔵庫等が取り囲む、同心状の配置とします。外周部は、東側に収蔵部門、北側に研究部門、西側に事務管理部門を配し、各部門を明快にゾーニングします。

■拡張領域の確保

展示室のすぐ裏側にバックヤードがあるので、研究部門の展示への転用、展示部門の研究への転用といった、部門を越えた利用形態の変化に柔軟に対応できます。さらに、両サイドの「震災の庭」「復興の庭」へ増築して、それぞれの部門を拡張することも可能です。

■柔軟な設計プロセス

各展示室は平面の大きさとプロポーションを違えています。設計段階で、展示計画のニーズに合わせて、展示室をアレンジしていくことが可能です。その際にも空間的な骨格や魅力を保持しつづけることができます。

■機能連携

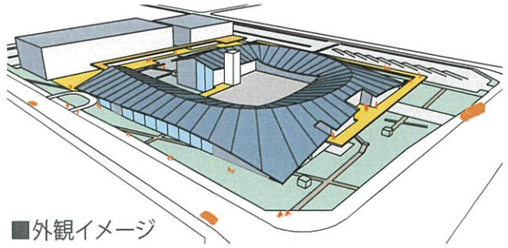
展示部門と収蔵・研究・管理部門が背あわせで、両部門が長く接触しており、様々な相互連携のアレンジが容易となります。収蔵庫の一部を見せていく収蔵展示、展示との連携を図る資料閲覧が可能となります。

■動線計画

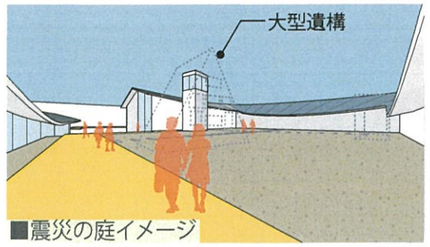
内側の展示動線と外側の管理用動線とに区分し、展示来訪者と研究・管理者の動線が交わらないようにします。展示動線は一筆書きのシンプルなものとし、利用者がわかりやすく、管理も容易です。
管理用動線は外周に設け、内部の研究者の活動を可視化します。研究部門の夜間利用といった個別運用にも対応が可能です。

■セキュリティゾーニング

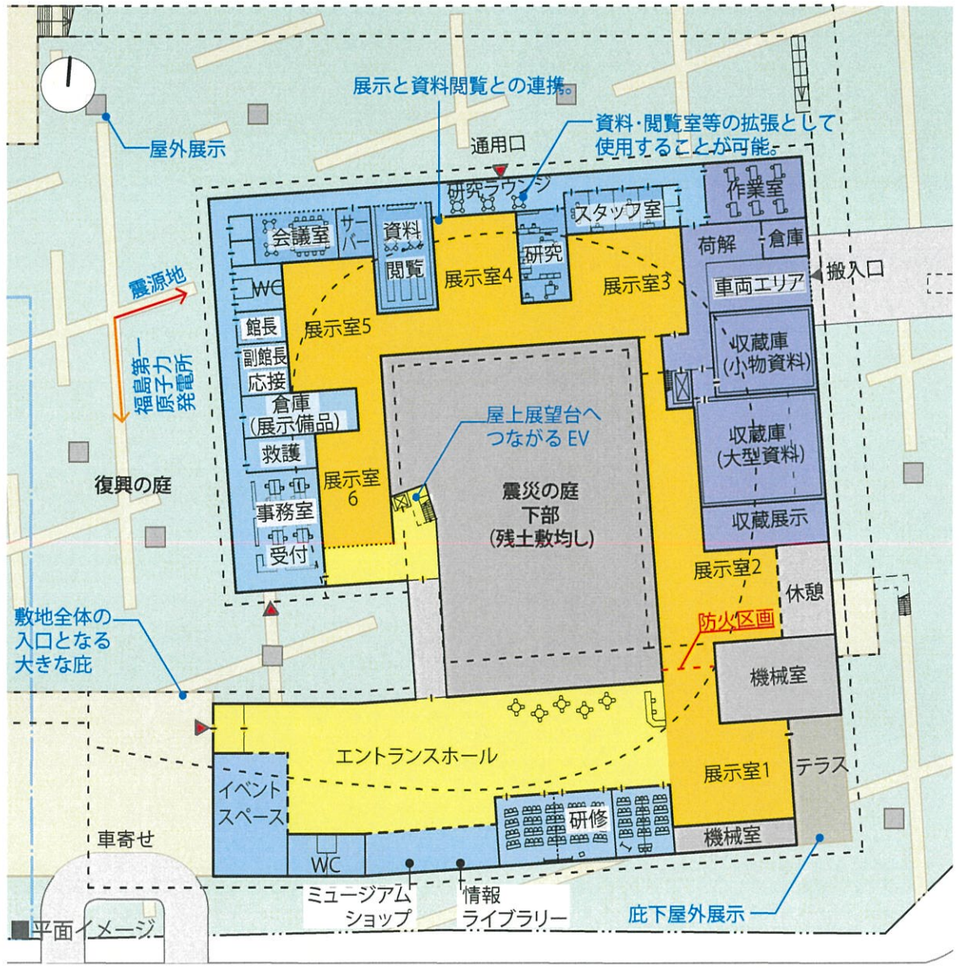
奥に行くにつれてセキュリティレベルが高くなるセキュリティゾーニングとします。



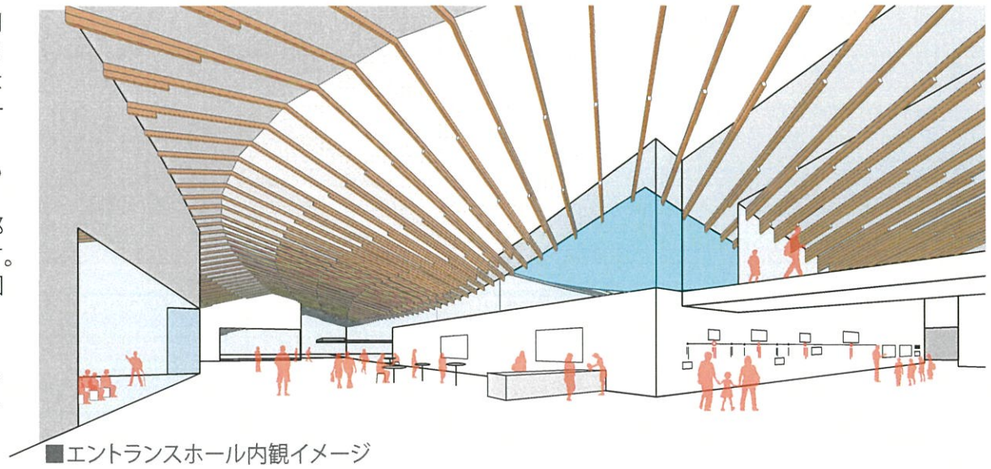
■外観イメージ



■震災の庭イメージ



■平面イメージ



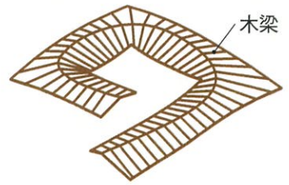
■エントランスホール内観イメージ

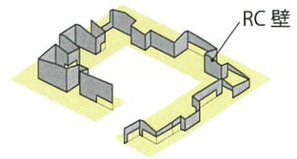
■屋外展示

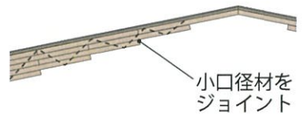
「震災の庭」と「復興の庭」を屋外展示の場として位置づけます。「震災の庭」にはがれきや遺物などを展示し、過去を振り返る場とします。「復興の庭」では町で興っている研究活動などを発信して、双葉町のこれからを伝えます。性格の異なる二つの庭を設け、アーカイブ拠点の使命である「今まで」と「これから」を語る場所とします。

■構造計画

水平抵抗要素となるRCの自立壁の上部に、軽量の木造屋根架構を載せた構造形式とします。RC壁は平面的にも断面的にもクランクしながら伸びていくかたちとし、剛性を確保します。屋根架構は、小口径の製材部材を持送り状にジョイントしたものとして、県産の木材を活用します。



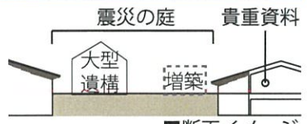




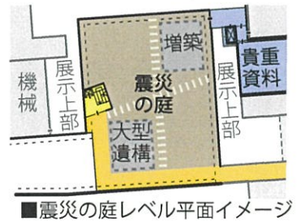
4. 保存資料の多様性を踏まえた新たな資料保存エリアのあり方について

■様々な資料保存のあり方

中庭である「震災の庭」は、収蔵展示が可能な場所となります。大型の屋外保管が適した資料の展示にも対応可能です。長期的には、新たに収蔵展示物に合わせた別棟を増築することも可能です。
貴重資料の収蔵は、収蔵庫の上階に保管スペースを設け、水損を避けられるよう配慮します。



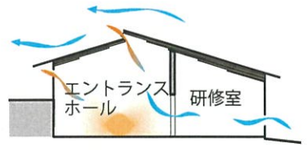
■断面イメージ

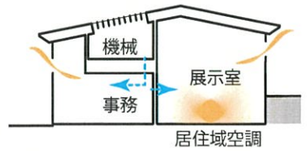


■震災の庭レベル平面イメージ

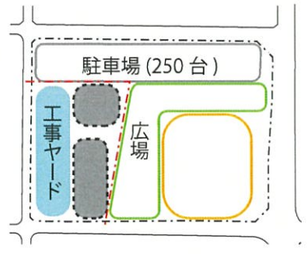
■環境計画

エントランスホールの棟部分に頂側窓を設け、日中の卓越風向である南東からの風による誘因、天井の高さを活かした重力換気による空気の流れを作り出します。
電気系の機械室は上部に設置し、水損を防ぎます。空調機械室はゾーンごとに設け設備ルートを最短とします。天井の高い空間に対して、居住域空調を行い、効率を高めます。





居住域空調

■工事計画

産業交流センター、多目的ホールの建設時には、それぞれ個別の搬入路、工事ヤードが確保できるようにし、工事中もアーカイブ施設の利用が阻害されないよう配慮します。また、建設時に生じた残土は中庭に敷き均し、コストを削減します。